

第6分科会を中心に

岡山 香

(横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター 助手)

1. はじめに

私の所属する貿易文献資料センターは、経済・貿易分野の資料を中心に所蔵する経済学部附属の資料室である。所蔵資料の中には経済政策・国際関係の研究において重要な戦前戦後期の資料が多く含まれ、そうした貴重コレクションの保存体制の強化と整備・公開が求められている。近年の重点事業としてコレクションの整理・データベース化に取り組んでいることから、データベース構築の2つの事例を取り上げた第6分科会「データベースの創造」に出席させていただいた。

2. 「専門情報データベースのつくり方・使い方 女性情報ポータル“Winet”を事例として」

前半の(独)国立女性教育会館情報課長の江川和子氏による講演「専門情報データベースのつくり方・使い方-女性情報ポータル“Winet”を事例として」では、組織と事業運営・既存データベースの再構築から“Winet”公開までのプロセス・“Winet”に含まれる各種データベースの概要について報告が行われた。

国立女性教育会館の提供する女性情報ポータル“Winet”は、Online上で男女共同参画・女性・家族等に関する様々な情報を収録したデータベースの総合窓口である。国立女性教育会館内の図書館、女性教育情報センターの来館利用者は下降傾向である一方、“Winet”へのアクセス件数は上昇しているようだ。説明されたように、来館者数として表れない所蔵資料や情報に対するニーズが存在しているのは確かである。効率的な情報収集の手段として、今後ますます非来館型の利用が増加するのではないかとと思われる。

“Winet”に掲載されたデータそのものの有用

性は言うまでもないが、シソーラスの整備・横断検索機能・新着資料アラートサービス・地図情報の表示・数量データのExcelファイルによる提供といった利用者にとって大変便利な機能を備えているという印象を受けた。データベース作成・公開に際しては利用者が何を求めているかを十分考慮し、利用者ニーズに適合した形でデータベースを提供することが極めて重要であると、再認識した。また、講演で述べられたように、データベースのコンテンツ・検索機能のいずれも、利用者・時代・環境の変化に柔軟に対応し、随時見直し・更新を検討することが不可欠であると考える。データベースの継続的管理の必要性に対して江川氏が表現された「データベースは生きている(つくってみて、育てていく)」が、大変印象的であった。

3. 「日本の音楽資料～童謡・唱歌索引データベース」

次に、国立音楽大学附属図書館の松浦淳子氏・南部好江氏による講演「日本の音楽資料～童謡・唱歌索引データベース」では、組織と所蔵資料の特性、音楽資料のOPAC検索方法、童謡・唱歌索引データベースの概要が報告された。

楽器演奏・音楽鑑賞を趣味としていることもあり、楽譜や録音資料・映像資料を多数所蔵していること、OPACの検索項目に作品番号・音楽形式・演奏手段が含まれること、「童謡・唱歌索引データベース」はドレミファソラシの入力によりインチピット(曲の冒頭の旋律)で検索できること等、音楽分野の専門図書館ならではの特徴を興味深く拝聴した。後日国立音楽大学附属図書館のOPAC・データベースにアクセスし、講演で事例説明された特定の曲の楽譜の検索、全集や曲集の中の1曲の検索、インチピットによる検索を体験してみた。私の所属機関では通常取り扱うことのない音楽資料およびそのデータベースの検索機能について新鮮な気持ちで学ぶことができ、大変有意義であった。

「童謡・唱歌索引データベース」は、冊子体目録

として発行された「唱歌索引(明治編)」に収録された情報に、大正期から昭和前期の童謡等の子どものための歌を新たに加えて電子化し、索引データベースとしてオンライン上で公開されているものである。当初のカードによる紙媒体の記録をデータ入力し、最終的にデータベースの公開に至るまで長期間の作業を要したこと、さらにその間「NEC PC98の一太郎」から「WindowsのAccess」まで数段階にわたってPCソフトの変更を伴ったことが報告された。データベース構築が実現するまで大変な御苦労があったことは、想像に難くない。情報技術の発展および時代の変化を痛感する次第である。講演では、データベース化着手当時の状況からデータ入力作業・修正作業、またデータベースの更新や検索機能についても詳細に御説明いただいた。私の所属機関でも冊子体目録の情報を基に再構築を目指しているデータベースがあるので、貴重な情報として作業の参考にさせていただこうと思う。

4. おわりに

講演においても質疑応答からも、情報検索サービスとしてデータベース提供が重視される一方、データベース構築の阻害要因となる資金不足・人員不足が恒常的に生じているという問題が提起された。データベース化への取り組みをめぐり、共通の問題を抱える図書館の多いことを実感した。管理やメンテナンスのため、データベースは作成時のみならず継続的な経費を要すると、事例報告

においても説明された。科学研究費補助金(研究成果公開促進費)等の外部資金の獲得が一層重要となるかもしれないが、実際、長期間にわたり潤沢な外部資金を調達し続けることは容易ではない。予算と人員の制約の中でいかに効率的にデータベースを整備し、クオリティーの高いサービスを維持していくかが課題となるであろう。

第6分科会に参加し、データベースによって情報発信機能を強化する重要性を再確認した。私の所属機関の既存データベースの大部分は、職員の業務用としての域を脱していない。資料管理・職員間の情報共有・業務効率化のために目録データベースを日々作成・更新しているが、検索機能を充実させオンライン公開に至れば、利用者の利便性が高まり、所蔵資料をさらに有効活用できる。先述のような資金・人員面の問題があることは否めないが、教育機関に属する資料室として、より高度な研究教育へのサポート体制を実現するためにも、情報提供能力を高め、可能な限りデータベースの公開推進に励みたいと考える。

データベース構築の2つの事例紹介、また質疑応答での他機関による御意見・御提案から、データベースを様々な角度から考察し、実に多くのことを勉強させていただいた。データベースについて改めて考えさせられることもあり、また新たな発見もあった。是非今後の業務に役立てたいと思う。このような貴重な機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。

(おかやま かおり)